第３回臨時幹事会

開催日時　2021 年 9 月 23 日　19:00～

開催場所　オンライン（zoom を利用）

議題

１．選手権のみの開催について

２．開催判断基準の見直し

３．インカレ SPU 構想について

４．ICMR2021 の枠計算について

１．選手権のみの開催について

若月　-「ロング選手権のみの縮小開催について」について説明-

　概要　ICSL2021 について現在は昨年同様併設大会は開催せず、選手権の部と一般の部のみの開催を目指して準備が進んでいる。しかし感染状況によってはロング選手権の部のみの開催しかできない可能性が浮上している。

　論点　①「選手権のみの開催」でもインカレの意義は保たれるのか

　　②最大 200 万円の赤字を背負う価値・会計体力・カバーする施策はあるのか

　議論の流れ　①が認められた場合に現実的な問題（②）を検討する。

若月　まずは①について議論する。私の意見として、まずインカレという大会がどういった機能をもつのか整理し、それが「縮小開催でもその機能は保たれるのか」という方向で考えたい。

　●インカレがもつ機能

　　選手目線　・学生日本一を決める唯一の大会

　　・多くの学生競技者の目標となる、モチベーションとなる大会

　　オリエンテーリング界全体　・運営ノウハウの蓄積・継承

　　・OBOG コミュニティの創出

若月　次にインカレがもつ機能は縮小開催でも満たされるのかを考えたい。

-「満たされない」とする意見-

近藤　自分が出場した 1 年生の時のインカレでは、選手権出場者へのあこがれよりも、同期で優勝した選手の存在に影響を受けた。選手権の部のみの開催ではそういった横のつながりは限定されてしまう。選手権クラスのみがインカレではないのではないかと思う。

羽田　選手権クラスはセレを通らなければ出場できないため、憧れの的でなければならない。選手権の部のみの開催の場合、応援のためだけに会場まで足を運ぶ人は極めて少なくなるのではないか。選手権の部の選手の活躍が、選手権の部に出ない人たちにとってもモ

チベーションとなることが必要なのではないかと思う。
牧島　今の１・２年生はオリエンテーリングの経験が少ない世代である。インカレは学生オリエンテーリング界を盛り上げるための行事である。選手権の部のみの開催となってしまうと、今後選手権を走るであろう１・２年生への影響は限定的なものになってしまうのではないだろうか。
-「満たされる」とする意見-
永山　確認だが、あくまで前提として一般の部も含めた開催を目指しているが、選手権の部しか開催できないとなった場合に開催するか中止にするかという議論で間違いないか。
若月　その通りである。
永山　選手権のみの開催であったとしても「学生日本一を決める大会」であることは変わりないし、方法を考えれば１・２年生にも観戦してもらうことはできるはずである。また運営ノウハウの継承も、たとえ部分的になったとしても達成される。開催しなかった場合そういったメリットがすべてなくなってしまう。中止にするメリットと天秤にかけると、選手権のみでも開催するメリットの方が大きいと思う。
金澤　新入生への影響について。新入生に学生オリエンテーリング界の広がりを伝える機会としてインカレは機能していると思う。これについては、選手権のみの開催であっても演出に力を入れて現地での応援と遜色ない観戦環境を提供できればある程度達成されるだろう。その他の目的も、選手権のみの開催であっても中止するよりはよっぽど確保できるのではないだろうか。中止よりは縮小規模であっても開催したほうが可能性を残せるだろう。
羽田　永山の話を踏まえると、選手権のみの開催を疑問視する理由が②の会計問題くらいしか残らないように思う。
衣笠　①の質問は、「選手権のみの開催であってもそれはインカレと呼べるのか」といった意図の質問だと思って聞いていたがどうか。
若月　そういった意図である。
山川　準備は着実に進んでいるが、利用する会場側の判断で中止に追い込まれる可能性はある。本議題はそこで私が提案したものである。衣笠が言ってくれたように、「選手権クラスのみの開催でもインカレと呼べるか」を考えてほしく、それは主催団体である日本学連が決定することだからである。現在想定しているのは、会場が利用できなくなった場合に、中止とするのではなく会場をとらない形で強行開催するという方法もあるのではないかということである。会場の利用を停止する権利は当然矢板市にあるが、行事を中止させる権利は矢板市には無いだろうということである。
選手権・一般の部両方の開催と中止の中間的な案として、選手権の部のみの縮小開催を提案しているということである。
その場合競技運営は練習会レベルのものになるだろうから、その分配信に力を入れることを想定している。

谷野　お金について、現在の会計状況を認識するべきである。また会場を利用しないと言っても、地元との関係に悪影響を及ぼす可能性は残っているということも忘れてはいけない。
若月　会計面については後程整理して議論したい。
羽田　モチベーションという側面で、一度選手権のみの開催という前例を作ってしまうと、今後も「選手権のみになるかもしれない」という可能性が選手のモチベーションを妨げかねないというリスクがあると思う。
若月　やはり一般の部への参加を予定している選手への影響が大きいのかなと思う。それも大事だとは思うが、自分の意見としては一般の部の選手のモチベーションという観点から選手権の部の選手のモチベーションまで奪うのは違うのではないかと思う。
今までの議論を踏まえて選手権の部のみであってもインカレとして認めるかどうか、挙手を願いたい。

若月　幹事の総意としては選手権のみの開催であってもインカレとして認めることとする。
それでは次に金銭的な問題について議論をしていきたい。
実行委員会の試算では選手権の部のみの開催となった場合に最大 200 万円の赤字が発生する。詳細は資料 1-6「ICSL2021 予算案(学連共有用)」を参照。
現在スポーツ庁からの支援の申請準備を進めている。これは自治体からの要請で中止となった場合に必要経費を補填してもらう制度である。縮小開催時にも適用されるのかは現在問い合わせ中だが、期待は薄い。
日本学連の会計状況も整理すると、通常時の収益としては①学連加盟費②地図売り上げ③ICMR の収益の 3 つがあった。加盟費・地図収入は回復傾向だが例年の水準には満たない。ICMR は貸付金 150 万円を支払っているが 1 年順延となっており、今年開催された場合に返って来るという見込み。収入としては回復傾向にあるが、依然として危機的状況にあると言える。
現在の残高について会計から説明をお願いしたい。
鈴木　すぐに動かせるお金としては 2 つの口座で合わせて 1000 万円近くある。すぐには動かせないお金としては 1500 万円程度ある。
若月　これで現在の会計状況は理解いただけたと思う。また昨年度の ICL では参加費を抑えた結果 400 万円の貸付を行った結果で収支プラスマイナスゼロとなった。
今回は参加費を上げていることもあり最大 200 万円の赤字の見込みである。
会計状況も理解した上でどう考えるか、改めて意見を聞きたい。

-縮小開催に反対とにする意見-
衣笠　縮小開催の場合は補助金が下りず、200 万円の赤字となるという前提で意見する。
200 万円の赤字という数字を感覚的に理解しやすく考えると、加盟員 1 人あたり 2000 円の

負担が無条件に生じてしまうということである。この実質的な負担を負うと考えられる加盟員たちに対する恩恵としては見合わないのではないかと考える。
若月　選手権クラスを開催することによるメリットをどう捉えるかということになる。他に意見は無いか。
羽田　ICSL の予算案を確認したが、2021 年度大会は現時点ではまだ試走を 1 回しか行っていないようである。最大 200 万円の赤字という話だが、現時点ではどの程度の出費があるかを知りたい。
山川　補足すると、一次調査が今週で終了。週末に試走を行い二次調査という予定になっている。既に一次調査を全域で実施しているため、今止めたら 100 万円で済むというような話ではない。

-縮小開催に賛成とする意見-
永山　インカレは今年限りのものではなく、これまで継続してきており、そしてこれからも継続していく意義のあるものである。そのため渉外上利用が可能であり、実行委員会が開催できると言っているのであれば、たとえ今回赤字となったとしても将来何かしらの形でリターンが得られるのではないだろうか。投資と思って開催の判断をしてもいいのではないだろうか。
浴本　楽観的な意見になるが、40 年以上続いてきたインカレを途切れさせることは 200 万円以上の損失だと感じる。また昨年は賛助会費が例年の 9 倍になったという話があったはずである。インカレ開催に向けて寄付を募れば、満額とまでは言わずとも少しは費用を回収できるのではないだろうか。
若月　自分もこの意見には賛成で、赤字になったとしてもそれを少しでも軽減できるように努力しなければならない。一部補則をすると、今回の赤字の試算には昨年実施した地図販売付きの賛助会費収入の見込みも含まれている。
羽田　今の意見に関して、もともと少なかったものが 9 倍になったのであって、今年も同じような振れ幅での増額が見込めるものではないだろう。最大でも 54 万円程度と考えるのが妥当だろう。
　継続性という話を考えるのであれば、今口座にある 1000 万円から 200 万円もの支出をしてしまうことが非継続的なのではないかと思ってしまう。今年度限りだからと言って赤字を許容するのは無理があるのではないだろうか。
　またこの幹事会での多数決は程度競技への関心が高い人たちの中での決定であるため、加盟員全体の総意とは異なるものであるかもしれない。
若月　赤字については今後状況が改善されることを見越して、期待しての拠出となってしまうのはそうだろう。
　承認のプロセスとしては幹事会での方針決定後に総会での承認という形となるので、もし加盟員全体では反対が優勢であるならば総会で否決されることになるのではないだろう

か。
羽田　総会に持ち込む際には日額の会計状況は公開されるのか。
若月　公開しなければ判断することは難しいと思っている。
山川　一点参考話を。理事会で今年の高校野球での議論の話を耳にした。高校野球でも入場料収入を切ってでも 2 年連続の中止は回避しなければならないという結論に至ったという。高野連の場合は大人たちによる議論だが、オリエンテーリングの場合はそれが学生の皆さんに託されている。かなり重い判断が迫られているということである。

若月　ここまでで開催のメリットデメリットを整理してきた。また総会で提言するには数年スパンでの財務シミュレーションも必要となって来るだろうし、今年度できる赤字回収のための努力も提案しなければならないだろう。
数年スパンでのシミュレーションは宿題とし、最終的にどうするか、総会に持っていきたいと思う。
他にまだ議論されていない視点等あれば意見していただきたい。
谷野　結局総会にかけることで決まったということか。
若月　最終的には総会で決定するというつもりでいる。
永山　「縮小開催の場合に生じる 200 万円の赤字を許容するのか」という話を総会でいきなりしても判断が難しいのでこの場で議論したと認識している。今回出た開催することのメリット、赤字を許容することのリスクなどをしっかり提示すれば、総会の参加者も論点が理解できるだろう。
若月　しっかり論点を提示した上で総会にかけたいと考えている。
浴本　質問だが、数年スパンでの会計シミュレーションが総会までに作成できるのか不安である。その点どのように考えているか。
若月　そこは会計局のメンバーと詰めていきたい。
谷野　会計のシミュレーションについて、昨年の幹事会で過去のデータを取りまとめた記憶している。それを参照すればシミュレーションも可能だと思うので、一緒に考えていきたい。
若月　この議題については詳細を詰めて総会で提示できるよう準備を進めていく。

２．開催判断基準の見直し
若月　筑波大学から意見書が提出されたため今回議題として取り上げている。意見書を出していただいた小牧氏より説明をお願いする。
小牧　-「意見書_筑波大学」について説明-
本書は筑波大学体育会オリエンテーリング部の意思決定機関を通して作成したものである。
　概要　ICSL の日本学連での開催判断基準として「選手権の部の 3/4 以上の参加」を目安

とすることについて再考を要請するものである。
インカレ開催には以下のような意義があると考えている。
・選手権者を決める
・日本におけるオリエンテーリング競技者の育成の場である
・多くの人と交流する機械である
・運営も含め、ノウハウを蓄積できる機会である
したがって開催中止の判断は慎重に行わなければならないと考えている。

問題点
・3/4 という数字の妥当性
競技の質について考えても明確な根拠はないし、会計面で考えるのであれば選手権参加者に限定する必要もないだろう。
・そもそも出場人数によって開催可否を判断していいのか
・新型コロナウイルスの状況は日々変化するものであり、3/4 の参加確約を得ることはむずかしいのではないか
・1 種目のみあるいは男女の片方のみで基準を満たした場合に開催されるか不透明である

提案
・選手権参加人数による開催判断の撤廃
・選手権の質の担保は必要である。技術委員会を中心に基準を見直してほしい

皆さんにお願いしたいのは、もう一度改めて議論していただきたいということである。

若月　まず指摘いただいた点のうち回答できるものに回答する。
・3/4 という数字の妥当性
昨年度の議論、選手権の質の担保と会計面の 2 点に基づく。ただし明確な根拠という部分は不足していたかもしれない。
谷野　3/4 という数字の妥当性は、事実上ロングの会計判断から適用している。会計の妥当性という面ではロングの実行委員会の試算に基づいて議論を行ったと記憶している。
昨年の議論について補足する。選手権出場人数による判断については、他のスポーツイベントの開催基準を参考としている。実例としては今年の WOC に関しても上位国の一定数の出場といった話もある。選手権出場人数を基準とすることはある程度の正当性があるのではないだろうか。
1/4 の出場ができなくなるような状況は、世間的にも危機的状況であった。1/4 の不出場という話がでてきてから緊急事態宣言が発令されたということから、3/4 という指標は結果

として緊急事態宣言のような事態になる境目付近なのではないか。
提案について、3/4 という数字の見直しは考えられるが、撤廃というのは難しいと思う。
経済面の問題を考えるのはもちろん必要なことだが、提案の内容は曖昧さを含んでいる。
今回の提案は３つに分かれているが、数字を見直してほしいということか、数字による開催判断を撤廃してほしいということか、どちら側のスタンスなのか確認したい。
小牧　要望は提案にある通りである。それを議論する過程で異なる所を見直す、違う発想を取り入れるなどは必要だと思う。ただ、現状のルールではインカレ自体は開催できる状況なのに自分たちの手で止めてしまうのではないかと思った次第である。
谷野　何かしらの開催判断基準自体は必要であるだろう。物理的に開催できない場合を除き開催するべきということか。
小牧　私自身はそう考えているが、それでは議論にならない。今回の幹事会を見ていて、日本学連はインカレの開催判断について競技面と財政面から判断するという立場にあると思った。その 2 点は切り分けて考えたほうが良いのではないだろうか。現状の基準では両者が混在しているように感じる。
たとえば、極端な話だが、一般・併設には十分な参加者が集まったが男子選手権の部は 30 人しか集まらなかったような場合。こういった場合には大会自体は開催するが男子選手権は選手権クラスとしては不成立として参考記録の扱いとする。こういったケースも想定し得ると思う。
永山　筑波大として言いたいのは、まず開催できるのに中止にするということへの疑問である。運営が開催できると言っているのであれば、3/4 を満たない場合に中止にするのではなく、開催した上で技術委員会でそれを選手権として認めるかを決定するという方法もあるのではないかという話である。
若月　「切り分けて考える」というのはいい視点と思ったが、それは主題ではないのか。
小牧　私たちの意見としては、切り分けた結果経済面を基準にしないべきであるというものである。ただし議論を聞いた結果、基準を考えるにあたり競技面と経済面が切り分けられていないということが明らかになったということである。
谷野　筑波大学としてはどうしてほしいか、簡潔に説明していただきたい。
小牧　筑波大学としては、選手権出場人数によって大会開催の可否を判断することをやめてほしいということである。
若月　今後の方針としては、現状の基準の説明が不足・明示できていない部分をシミュレーションをもとに回答したい。選手権のみの開催にも繋がるが、検討していきたい。
この場での正式な回答は難しいため、しっかりシミュレーションをした上で改めて説明したい。
谷野　技術委員会や理事の視点から意見があれば伺いたい。
谷川　ひとつ個人的に思うこととしては、渉外上開催できるのであれば開催すればいいのではないか。意見書に対して思うこととしては、開催基準を設ける議論の際にこの意見を

出してもらえればよかったのではないか。内容はいいと思うが、開催判断が迫っているタイミングで言うのかとは思う。
木村　今回はコロナ禍という異常時の対応と認識しているので、制度化するのはなかなか難しいだろう。同じく異常時の判断として、2012 年の脅迫事件があった時の話をしたい。実行委員会としては強引に開催に向けて動いたが内容は限られたものであった。そこで前日に開催した総会で、明日のレースの優勝者を選手権者としてよいか決議した。その結果選手権として認めることとなり、選手権者を決定することができた。過去にはそういった決め方をした。最終的にだれが決めるのかさえはっきりしていれば、これは総会になると思うが、よいのではないか。
谷野　ありがとうございます。話は少し戻るが、筑波大学としては今年の秋インカレから変えるべきという意見か。
小牧　その通りである。過去にさかのぼるものや春インカレに向けたものではない。
谷野　谷川氏の言う通り、もう少し早めに提言いただきたかった。
小牧　本当は議論している段階で意見書を提出するべきだと思うが、各加盟校に伝わってきてから意見をまとめたため今のタイミングとなったことは理解いただきたい。
若月　期限が迫っている中ではあるが、しっかり持ち帰って根拠を示せるよう準備していきたい。

３．インカレ SPU 構想について
遠藤　-「インカレ SPU の設置」について説明-
　課題　現在のインカレ運営は持続可能性が低い状態にある。山川氏に依存している現状からの脱却は常に課題である。現在は開催 1 年前に実行委員会を結成しているが、4 年レベルの中長期的なスパンでの計画に基づき実行委員会を動かす必要があり、その面倒を見る機関の設置が必要である。
　概要　比較的高齢の現在の学連理事とは別に、若手 OBOG が主体となって計画提案する機能的なユニットを設置したい。
　詳細　日本委員会の常設委員会として設置する。4～8 名程度。任期は 2～4 年、再任は妨げないとしているが、なるべく代謝の良い組織にしたい。細則（別添）に基づき活動する。

今回の幹事会ではインカレ SPU に対して現役学生目線からの疑問点等を投げかけてほしい。また現在非公式な活動であるインカレ SPU を、幹事会・総会の承認を得た公式の活動にできればと思っている。

遠藤　-「インカレ SPU に関する細則」-について説明

内容　概ね 4 年先までの開催計画を立案する。遅くとも開催 1 年前の時点で適した会場・テレインの手配、主要役員の選任、関係者との合意形成を概ね達成することを目標とする。
何か質問等あれば。
衣笠　第６条２について「クローズテレイン～は、インカレ SPU の提言を受けて理事会がこれを決定する」とあるが、これは指定方法がこれに限られることを示しているのか、SPU に決定権が無いことを言いたいのか不明なので確認したい。
また個人的な意見としては、任期が設定されているが、任命方法やメンバーの承認についてはどういったプロセスを考えているか知りたい。
遠藤　第６条２についてはそこまで深い意味は無い。クローズに関して特別な制限を加えるものではない。しいて言えば、クローズに際して他団体との調整が必要となった場合、その主体は SPU が担当することになるだろう。
人選（第３条）についてつけ加えると、このシステムで継続的に人が入るかは懸念事項である。卒業・就職した後にこういった責任をともなう仕事をするのは敬遠されてしまいがちである。したがって人集めは頑張らなければならないということは前提である。そのためモチベーションのある人材が配置されるよう、あえて適任者や任命方法を明示していないという側面がある。透明性があるとは言えないが、少なくとも出身の地区学連がばらけて公平性がある程度担保されている状態でなければならないだろう。
衣笠　意図していることは理解できた。
金澤　１年前までに５条２に定める７項目を達成する事は理解したが、「当該インカレの運営組織が実働状態に達するまで指導監督しなければならない」の部分が曖昧に感じる。どのレベルまで指導監督を行うことを想定しているのか確認したい。
遠藤　意図としては、規則を細かく設定すると達成できないまま運用されてしまうことになるので、最初はあまり制限しないような条文にしている。ただ、問題意識を持たれている点は正しいと思う。
SPU 構想が上手く回った場合、テレイン渉外のごく初期段階で SPU が実務を担当し、開催可能になった状態で最初の１人の運営者に渡すことになる。したがって「SPU だけで握っている情報がなく、実行委員会の重役の方が何ができているのか・これから何をしなければいけないかを把握できている状態」が「実働状態」ということになるという認識である。
若月　他に質問等ないようなので今後の手続きについて説明すると、連盟規約の改正が必要となるため最終的に総会での承認を経て発足となる。

４．ICMR2021 の枠計算について
若月　-「ICM2021 の競技者配分計算方法について」について説明-

選択肢
①直近に開催されたインカレミドルの成績をもとに配分
②直近に開催されたインカレ（フォレスト）の成績をもとに配分

①の選択肢の意見
若月　同じミドル部門を参照することにすれば、今後同様に穴が開いた時にも対応しやすいのではないかと思う。
Slack 上で衣笠君が過去の成績を整理してくれていたので、そちらを説明いただきたい。

衣笠　自分が行ったのは、これまでのインカレの枠数について、実際の枠数とその年のロングの成績に基づいて計算した枠数、2 年前の春インカレの成績にさかのぼって計算した枠数を比較した。相関係数をとって年度ごとに比較した結果、それほど明確な差は認められなかった。ミドルの成績、ロングの成績のどちらを採用しても大きな問題は生じないであろうということがわかった。
ただし今回はコロナ禍を挟んでおり、直近のミドルの成績が出た 2018 年度当時と状況が変わっていることが考えられる。そのためより近い状況下の成績であるロングを参照する方が妥当なのではないかと私は思う。
若月　今の説明で非常に納得したため、他に意見が無ければ②の方針で進めていきたいと思う。

若月　直近のインカレを参照する方針であることを関係各所に伝えていく。ただし、昨年度はロングの参加者が限られることから方針転換を行っている。この点について何か意見は無いか。

衣笠　基準を設けるべきとは思う。複雑だがひとつ考えられるのは、参加できなかった人の比率を全体から引き、通った分で割り振るという方法もあるのではないか。
金澤　基準を設けるかについてそもそも、ロング 2021 の枠は 2020 の枠を使うことが決まっている。2020 年ロングは参加校が限られたにもかかわらずそれが受け入れられていると認識している。個人的には基準を設けたほうが良いとは思うが、よほどの不公平が無い限りそのまま採用するというのも手だと思われる。
若月　昨年のロングは選手権クラスの不出場はそれほどなかったと思うがどうか。
谷野　2020 年ロングは開催直前まで判断を保留した。結果として新潟大学のみ出場ができず、北信越学連に問題ないか確認を取り合意が得られたため採用した。
金澤　たしかにその通りであった。
若月　昨年は一校だけだったというのもあるが、不出場校のいる地区学連に合意を得ることで枠計算を行った。

金澤　そうであれば基準を設けるべきと思う。ただし明確な意見は無いので考える。
若月　地区学連の合意が得られればという選択肢もあるかもしれない。
金澤　不公平感を諮るというのは、開催直前ないし開催後にならないとできないと思われる。そこから地区学連の同意を得るというのはスケジュール的に可能なのか。
若月　その場合開催前に実施するのはマストである。成績が出てからでは自地区学連に有利な選択肢を取ることになるため。
参加状況を見て直前に合意を得るというフローなら考えられる。
基準が必要かどうか、必要な場合どういったものになるか、技術委員会の谷川氏に意見を窺いたい。
谷川　どういった基準にするべきかはよくわからないため何とも言えないが、少なくとも基準を決めたのであればそれが適用されなければならない。幹事会や総会で決めていただくのがいいのではないかと思う。
若月　一旦基準を設けるべきかどうか確認したい。
幹事の総意としては基準を設けるべきであることはわかった。それでは具体的にどうするか、現在出ている 2 つの方針、新たな計算式を用いるか地区学連の合意を得るかについてどちらがよいと考えるか確認したい。

地区学連の合意が得られれば良いという意見が多かった。すぐに決めなければならない事項なので明確な反対意見が無ければこのまま進めたいがどうか。
金澤　地区学連の合意が得られるかどうかについては懐疑的である。もし合意が得られなかった場合には独自の計算を用いるのか。
若月　合意が得られなかった場合は ICL2020 の結果を参照することを想定している。
浴本　地区学連への合意を求める際の文書はどのような形になるか。
若月　例えば、現時点で参加できない可能性のある学校がこれだけあるが、それでも枠計算の参照元として使用して問題ないか。というような内容になるだろう。
幹事会の方針としては、地区学連の合意という段階を挟み、直近のインカレの結果を参照するということとする。

若月　本日の臨時幹事会は以上とする。